

■はじめに

3 月 1 日に举行された市立一条高等学校の卒業式に、今年も参列しました。式は 1 時間半にも及びましたが、その間微動だにせず式に臨む在校生・卒業生の姿に感動を覚えました。答辞では、校歌にある「真と善とを旨とせる」「奈良一高に栄えあれ」という言葉を引用し、真とは何か、善とは何かを問い続けた 3 年間であったこと、後輩に一条高校の未来を託したことが読み上げられました。答辞を聞いて、なんて立派な卒業生なのだろうと思うとともに、卒業式まで生徒たちを見守り、一方で厳しく鍛え育てていただいた一条高等学校の先生方への感謝の気持ちで一杯になりました。

このあと幼稚園の卒園式、小・中学校の卒業式が控えています。どうか最後の授業として、またそれぞれの修了年にふさわしい式典になるような準備をお願いします。

■春日大社の桧皮葺き替え見学会への参加から

現在、春日大社では平成 27 年から 28 年の第 60 次年造替に向けて、各社殿の修理事業が行われています。その修理事業において、社殿の屋根の葺き替えの見学会が実施されています。葺き替え作業が間近に見られる機会はそうそうありませんので、先日私も見学会に参加し、ご神体を移す移殿（内侍殿）の葺き替えの様子を見てきました。



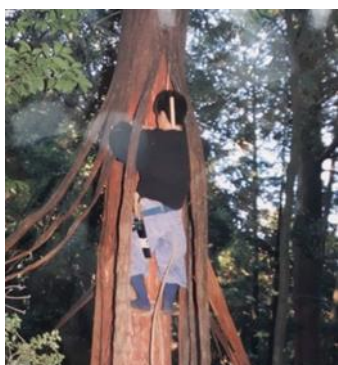
式年造替といえば、昨年は伊勢神宮と出雲大社の式年遷宮がずいぶん話題になったようです。式年遷宮と式年造替について、簡単に説明を申し上げます。式年とは決まった時期という意味ですが、20 年ごとに遷宮が実施される伊勢神宮では、一度戦国時代に途絶えてしまっているようです。また、出雲大社では現在の本殿が 1744 年に建てられて以降、4 回遷宮が実施されていますが、傷んだ時だけに修理をしており、式年といえどもだいたい 60 年に 1 回修理が実施されるとのことです。これに対して、春日大社は奈良時代の 770 年に第 1 回目の式年造替が実施されて以来、きちっと 20 年ごとに造替を繰り返し、今回で 60 回目を迎えるのです。一度も途切れることなく、千数百年間造替が続いているという点で、改めて春日大社のすごさを実感します。

遷宮と造替では実施の方法が少し違ってきます。遷宮ではもとの社殿が建っていた場所をきれいに整地して隣に新しい社殿を建て、その新しい社殿にご神体を移します。これに対して、造替ではご神体は移しますが、同じ場所に社殿を建て直します。春日大社は本殿からご神体を別の場所に移し、移した場所でお祭りをしている間に本殿を作り替えているのです。

では、なぜ20年ごとに屋根を葺き替え、本殿を新しくするのでしょうか。私は、神様が清浄できれいなところを好まれるという話を聞いたことがありますが、一番の理由は技術の継承のためだということです。桧皮の葺き替えでは両端にベテランが、真ん中に経験の少ない若い人が立って、ベテランが両端から屋根全体を見ながら、若い人に指導や助言を与え、葺き替えを進めていくのだそうです。若い人はベテランからの指導や助言を受けることで、作業に必要な知識や技能を修得していきます。こうして現在の若い人が20年後ベテランとなり、次の若い人に指導や助言を与えていきます。こうして、技術の継承が脈々と受け継がれていくのです。桧皮も20年くらいしかもたないで、20年に一度葺き替えをすることは、技術の継承と社殿を守るという点からも理にかなっているようです。



また、春日大社は3つのことを守り続けていると聞きました。1つめは現在30万坪ある春日大社の鎮守の森を、変わらぬ姿でずっと守っていくということです。2つめは儀式を守ることです。春日大社では、朝・夕のお勤めも含めて、年間2,200回もの儀式が執り行われているそうです。私たちは新嘗祭などの大きなお祭りはよく知っていますが、日々5~6回天下国家の安泰あるいは万民の幸福を願う儀式が執り行われているということを知っている人はそれほど多くないのではないのでしょうか。そして、3つめは社殿を守ることです。20年ごとに造替を繰り返すことで社殿を新しくし、技術を継承する。これら3つのことが1,300年途絶えることなくずっと守られてきているのです。なぜ、春日大社はこの3つを大切にしているのでしょうか。それは、春日大社が見えない神様を奉っているからなのだそうです。神社は、お寺のように目に見える仏像を奉っているではありません。神様は見えないので、儀式や社殿など見えるものをきちっと守り、伝えていくことを大切にしていると聞き、なるほどと思いました。

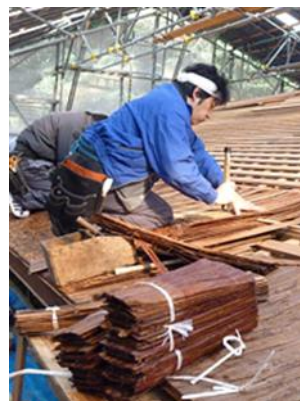


さて、桧皮葺の話に戻ります。桧皮葺に使う桧の皮は樹齢100年以上の大きな桧の立ち木から採取します。100年以上経った木でないと、木が枯れてしまうのだそうです。皮をめくる人を原皮師（もとかわし）と呼びますが、皮を採取する時には、その下の中の皮に傷をつけないよう、慎重に作業が進められます。また、桧の皮を屋根に留めるためには竹釘を使いますが、この竹釘を作る人を竹釘師と呼びます。竹釘はそげが出ないように火であぶって表面を滑らかにします。桧皮の葺き替えでは22万本もの竹釘を使うそうですが、現在、竹釘を生産しているのは国内で一事業所だけのようです。そして、屋根を葺く、葺師がいます。昔から脈々と受け継がれてきたこうした技術によって、桧皮葺は支えているのです。3つのうちどれか1つが欠ける

と桧皮葺は成り立ちません。

しかし、桧皮の葺き替えには新しい技術も取り入れています。桧皮の下には水きり用の3センチの銅板が入っています。この銅板は昭和に入ってから使われるようになったそうですが、この銅板があることで桧皮の持ちがずっと良くなるらしいのです。もうすぐ私たちは受けつがれた技術と新しい技術の融合によって美しくなった屋根を目にすることができるでしょう。

市内の小学生もこの見学会に参加したそうです。子どもたちには、本物の技術の継承を自分の目で見て、「奈良にこんな素晴らしいものがある」「技術が伝承され、守り伝えられてきている」



と肌で感じるができるいい機会になったのではないかと思います。いろんな体験をしてすごいと思う感動があれば、きっと大人になった時に自分の子どもにもそれを伝えてくれていってくれるだろうと思っています。そして、まさにそのことが伝えるということなのではないかと思っています。

■終わりに

私はつねづね先生方に自分が感動した思いを子どもたちに熱く語ってあげてほしいとお願いしてきました。子どもたちに熱く語るには、まず、先生方に感動する体験をしてほしいと思っています。もうすぐ東大寺二月堂の修二会の研修が始まります。二月堂のお堂の中で一体何が行われているかを、自分の目で、耳で、そして肌で感じてほしい。そしてその感動を先生方の言葉で熱く子供たちに語ってあげてください。そのことが感動の継承・知識の継承につながるのだと思います。

